

# 漢詩から和歌へ (三)

——良岑安世・僧正遍昭・素性法師——

石井公成

## 一 梅の花の香りを厭つ

『古今和歌集』春歌上の部において、最初に登場するのは梅の花だ。以後も梅の花の歌、それも匂いを讃えた歌が次々に現れるのは、当時、梅の花の香りがどれほど愛されていたか、いかに春そのものと同視されていたかを物語っている。しかし、『万葉集』では、匂いはほとんど題材とされることがなかった。梅花の香りに対するこうした愛着は、中国文学の影響によるものであり、特に春の夜にただよう香りを喜ぶ風潮は、白楽天や元稹が用いた「闇香」などの詩語による。<sup>1)</sup>『古今集』の歌人たちは、当時の流行を追い、しかも後世の人から見れば日本古来の伝統であるかのような形で、梅の花が散ることを惜しみ、せめてその香りを袖にとどめて春をしのびたいと歌ったのだ。ところが、『古今集』には、梅の香りが袖に残るのを嫌った歌人が一人だけいる。素性法師だ。

寛平御時後の宮の歌合せの歌 読人しらず  
梅が香を袖に移してとどめてば春はすぐともかたみなら  
まし(春歌上・四六)

素性法師

散ると見てあるべきものを梅の花うたて匂いの袖にとま  
れる(同・四七)

題しらず

読人しらず

散りぬとも香をだにのこせ梅の花恋しきときの思ひでに  
せむ(同・四八)

この三首のうち、前後の二首はまさに当時の常識にそった歌であって、花が散ったあとでも思い起こすために梅の香りが袖にとどまってほしいと願っている。これに対し、素性は、梅の花については「ああ散っていくな」とただ見てすますべきだと言う。そして、そのように淡々と振舞うべきであるにもかかわらず、梅の花の匂いが袖にとどまってしまったことに対する困惑を表明するのだ。このため、従来は、「匂

いが残ると、かえって散った花が思い出されてつらいので困る」という方向で解釈されてきた。あるいは、『新撰万葉集』ではこの和歌を漢字で表記する際、「うたて」の語を「別様」と記しているため、「うたて」とは「格別に、異様に」の意だとして、その梅の花の匂いは特別に香り高いものだったのだと解してきた。

しかし、『古今集』では「うたて」の語は他に二例あるが、以下に見るように、「格別に」といった意味では用いられていない。

読人しらず

心こそうたてにくれ染めざらばうつるふこともおしからましや（恋五・七九六）

こまち

あはれてふ言こそうたて世の中を思ひはなれぬほだしなりけれ（雑下・九三九）

この二首の特徴は、悪天候や病気など、誰が見ても厭なものではなく、意外なものについて「うたて」と言い、その理由を示していることだろう。前者は、「あなた（の色）によってつい染めてしまった」という点で、自分の「心」を困ったものと見ており、後者は、「あはれ」という情に満ちた言葉をかけられることこそが、かえって世の中を思い捨てることの妨げとなるものだったとして、「あはれ」という言

葉を厭っている。素性の歌の場合、厭うべき存在ではない梅の花について「うたて」と言っているのだから、右の二首と同じ図式があてはまろう。このうち、世の中を思い捨てることができないと詠う後者の歌が仏教に基づいていることは言うまでもない。「心こそ」の歌も心を染める（染心）という表現を用い、その心がうつろってゆくことを述べている点で、仏教を背景としているものと考えられる。つまり、「うたて」という言葉を用いるこれらの二首は、いずれも仏教を意識した歌であることが注意されよう。

ここで考えるべきは、素性は、機知に富んだ『古今集』の歌人たちの中でも、とりわけひねり技の達者な歌人だったという点だ。そして、それ以上に、忘れてならないのは、素性は、僧侶だったことだ。この二つの条件を考えれば、「散ると見て」の歌に見える「うたて」の語について苦しい解釈をしなくても、散る花の匂いが袖にとどまるのを嫌がるという設定は理解できるはずだ。人気の高い大乘經典であって、藤原氏の氏寺である興福寺が最も尊重してきた經典、『維摩経』の観衆生品に見える天女散華の場面を思い起こせば良い。

わざと病の姿を示してみせた維摩を見舞うため、釈尊に命じられて菩薩たちや仏弟子たちたちが訪れた際、維摩の部屋にいた天女は、次のようないたづらをする。

時に維摩詰の室に一天女有り。……便ち其の身を現はし、

即ち天華を以て諸菩薩と大弟子の上に散す。華、諸菩薩に至れば、即ち皆な墮落するも、大弟子に至れば、便ち著して墮ちず。一切弟子、神力もて華を去らんとするも、去らしむる能はず。その時、天女、舍利弗に問ふ。「何故に華を去る」と。答へて曰く、「此の華は、如法ならず。是を以て之を去る」と。天曰く、「此の華、如法ならずと為すと謂ふことなかれ。所以は何ん。是の華、分別する所無し。仁者、自ら分別の想を生ずるのみ。仏法に於て出家し、分別する所有るが如きを如法ならずと為す。もし分別する所無ければ、是れ則ち如法なり。諸菩薩を観るに、華、著せざるは、已に一切の分別想を断ずるが故なり。譬へば人、畏るる時、非人、其の便りを得るが如し。是の如く弟子、生死を畏るるが故に。色声香味触、其の便りを得るなり。已に畏を離るれば、一切の五欲も、能く為す無きなり。結習未だ尽きざれば、華、身に著すのみ。結習尽くれば、華、著せざるなり」と。(大正十四・五四七下―五四八上)

すなわち、天女が天華を菩薩や仏弟子たちの上に散らすと、花飾りをつけて良いはずの菩薩たちの身には付かず、さらさらと墜ちてゆくのに対して、花飾りなどは禁止されている出家の仏弟子たちには、かえて華がついてしまつて墜ちないのだ。困つて神通力で払いのけようとしても、やはり墜

ちない。それを見た天女が払いのけようとする理由を尋ねると、仏弟子たちが「如法ならず(戒律に反する)」と答えたため、天女は、次のようにさとした。「華は無分別であつて、如法であるとかないとかは、あなた方の分別から生じたものにすぎません。諸菩薩に華がつかないのは、分別を断じているからです。何かを恐れていると、鬼などがそれに乘じてとりつくように、あなた方は生死を恐れているから、色・声・香・味・触などの五欲に束縛されてしまふのであり、煩惱が尽きていないからこそ、華がついて墜ちないのです」と。

素性の場合、梅の花の匂いがとどまつてしまつて困ると言っているのは、『維摩經』に登場する仏弟子たち、すなわち声聞たちが着ているものと同様、出家の衣だ。素性は、自分は大乗を誇る天台宗の僧侶である以上、執着を離れている大乘の菩薩たちのように、花が散つていく様子を淡々と眺めていけば良いはずでありながら、梅の花の匂いが自分の僧衣の袖にとどまつているのは、自分には小乗の声聞たちと同様、「色」や「香」などに対する執着があるからなのだ、というのだ。歌からは「匂いがどうしてもおちない」という困惑した感じが伝わってくるが、これは、「うたて」とは「事態の転移に対してどうしようもないという意に多く用いられる」という此島正年の指摘に合致する用法であり、『維摩經』の右の場面とも見事に一致する用法だ。『万葉集』で

は、梅の花が散る様子を天から雪がふることにたとえた歌がいくつも見られるうえ、素性の祖父である良岑安世が編纂した『経国集』の梵門の部、すなわち仏教関係の部の漢詩にも「天華」「散華」の語が用いられている。素性は、そうした伝統を踏まえて天女散華の場面を想起したのでろう。

天女散華のことを冗談に用いた先例としては、白居易が夢得、すなわち親友の元稹に送った戯れの詩、「齋戒満つるの夜、戯れに夢得を招く」（『白氏文集』巻六六）がある。白居易は、期日を限つての齋戒生活が終わろうとする前夜に、これまで昼は齋戒を守り、夜は坐禅したもの、「未だ全くは世間の縁を尽すあたはず」と述べ、明日は朝から再び杯酒に親しむつもりであり、今夜はとりあえず楽器の調弦だけさせてみた」と述べた後、次の句でしめくくっている。

方丈若能来問疾　方丈に、もし能く来りて疾を問はば、不妨兼有散天花　妨げず、兼ねて散花の天有るを

もし君が私の「方丈」に「問疾（病気見舞いに）」のために尋ねてくれるのであれば、散花の天女（に似た美女）もちゃんと待っているよ、というのだらう。「不妨」とは口語であつて「なかなかのくだ」と評価する気持ちを表す。むろん、自分のことを、方丈の居室で病気の相を示した維摩居士になぞらえ、美しい天女を誘い水にして親友の訪問をうながすという冗談を楽しんでいるのだ。

素性の歌は、寛平五年（八九三）頃の『寛平御時后宮歌合』では、春歌の三首目に録されており、三十五首目の「梅が香を袖に移してとどめてば」の歌より前にあるが、この歌合せは古歌からも選んでおり、勝ち負けの判定も記していないことから見て、明らかに後に編纂されたものであつて、その場でこの順序のとおりに詠まれたものではないとされている。素性の歌が、実際に歌合せなどの場で詠まれたとすれば、他の歌人が「せめて梅の花の香りだけでも袖にいつまでもとどめたい（が、それは不可能だ）」という趣旨の歌を詠んだのを受けて、「おや、そうですか。大乘の菩薩僧である私は、散つてゆくなあと淡々と見てすますべきでありながら、いや困つた、私の袖には梅の花の匂いがとどまつて離れません」と詠んだものではなからうか。そうでなかったとしたら、当時は梅の花について歌を詠む際は、香りだけでもとどめたいということをいかに巧みな形で表現するかを競うのが通例であつて、機知に富んだ素性には人一倍そうした期待が寄せられていたからこそ、その裏をゆく着想の歌を詠んでみせたと考えるべきだらう。

なお、「散ると見て」の歌の場合、素性が梅の花への執着を心から恥じてはいないことは、言うまでもない。素性は困つたと嘆きつつも、一方では、「自分ほど梅の花に思い入れが深い者はないからこそ、皆さんと違って、自分の袖にだ

け香りがとどまっているのだ」と諧謔をまじえて誇っているのだ。ただ、そうした面は強く出ておらず、どのようにも味わうことのできる歌風になっている。

この素性の歌について考える際、参考になる先例、つまり、「花」の語を用いたうえで「自分の衣の袖だけ」なので困る」と詠った前例が『古今集』にある。すなわち、前稿で取り上げた父、遍昭が仁明天皇の一周忌に際して送つてよこしたとされる歌だ。

みな人は花の衣になりぬなり苔の袂よ乾きだにせよ

(古今・哀傷・八四七)

すなわち、遍昭は、「(仁明天皇の喪が明けて) 人々はみな花のように華やかな衣に変わったものの、自分は一人だけ暗い色の衣のままだ。苔のような色をした僧衣の袂よ、せめて涙で濡れずに乾いてほしい(悲しみの涙がやんでほしい)」と嘆いたのだ。この場合、結果としては、天皇の崩御を最も悼み悲しんでいるのは自分だ、ということになる。素性は、この父の歌の構図を逆転し、「ほかの人たちの衣と違い、困ったことに私の僧衣の袖だけ梅の花の匂いがとどまっている。早く袖から匂いが落ちてほしい」と嘆いてみせたものと思われる。この場合、「散ると見てあるべきもの」という言明は、諸行無常を説き、執着をいましめる仏教の立場を前提としたものであるから、「うたて」と言わざるをえない

原因についても、仏教に関連するものに求めるべきだろう。素性は、父の遍昭と同様、花に対する愛情を否定しているが、それは裏返しの愛情なのだ。

中国の詩文でも『古今集』でも、梅の花、とりわけその香りについては、美女のイメージを重ねつつ詠われることが多いが、天華の芳香が素晴らしいことは諸経典が強調することであり、しかも『維摩経』の場合は天女が散らすのであるから、その妖艶さはいやまざることになる。そうならば、僧としては、そうした匂いが僧衣につくのはいよいよ困ることになる。とはいえ、そのような妖艶な雰囲気や素性が好んでいたことは、言うまでもない。半世紀以上前の文章だが、歌人でもあった太田水穂氏は、『古今集』における余情について述べる際、素性のこの歌について次のように評している。

たとへば散ると見てあるべきものをといふあたりの持たせかけてくる言葉の魅力だ。ことわりがましく人をひきつけて置いて、「うたて匂ひの袖にのこれる」といふのだから耐らない。これは梅のことでありながらたゞちに或る人躰(女)をさそひ出してくるほどの誘引がある。それが何か訴へるやうな又そよめかすやうな調べをもつて触れてくるために、読むもの、こゝろはこの纏綿とした言葉の雰囲気には囚はれてしまふ、畢竟するに古今集の持つてゐる哀情あるひは優思が柔らかな楽声となつて効

果をあげてゐるためだらう。<sup>(5)</sup>

これは、やや官能的すぎる解釈だが、「何か訴へるやうな又そよめかすやうな調べ」というのは適切な評であり、素性のこの歌の特徴を見事にとらえている。叔父の藤原冬嗣の歌、なをざりに折つるものを梅の花こき香に我や衣そめてん

（後撰・春上・十六）

は、軽い気持ちで折っただけなのに、その濃い香りで私は衣を染めてしまうのだろうかと詠んでおり、「もものを梅の花」という語法と梅の香りによって染まってしまうことを詠う点で、素性の歌ときわめて似ている。この冬嗣の歌でも、梅の花はむろん美女になぞらえられている。

なお、素性の歌について仏教の影響を指摘したのは、「この歌は、作者が仏者であるところから、その心も加わっているまいか。ただ、窪田は、改定版の序と冒頭の「古今和歌集概説」において、『古今集』における仏教の背景に注意すべきことを強調しているものの、個々の歌の注釈にあたっては、右の指摘に見るように、仏教の影響を一般的に示唆するのみで、典故などの具体的な説明はほとんど見られない。

## 二 仏典の利用

『古今集』に見える素性の次の歌も、經典を利用した例だ。  
忘れ草なにをか種と思ひしはつれなき人の心なりけり

（恋五・八〇二）

相手の心変わりを嘆くにあたって忘れ草を詠んだ歌は多いが、素性は右の歌では、忘れ草の「種」はつれなくなつた「人の心」だつたと述べている。それも、「心なりけり（心だつたことだよ）」という句が示すように、悲しい発見として述べるのだ。ここには、「人の心」一般の悲しいあり方が述べられている。『万葉集』以来、恋歌において「人の心」といった表現をする場合は、恋の場面における相手の心を指す例がほとんどだったが、『古今集』になると、そうした恋の苦しみを通して「人の心」一般を問題にするようになってきており、素性はそのような傾向を代表する一人だつたのだ。あるいは、「人の心」一般の悲しい傾向を特定の相手や自分の心において確認するという方向に変わってきていると言つた方が良いだろうか。

こうした「心……けり（ける、けれ）」という構図は、『万葉集』では見られないのに対して、『古今集』になると、いくつも登場していることが注目される。これは、『古今集』に見える自意識の発達とも関わる問題であり、また素性の頃になって独詠の例が増えたこととも関わる問題だ。「心」は、自分の思うようにならないからこそ反省・観察がなされるの

であり、恋の歌において心の探求が試みられるのは当然のことと言えよう。特に素性は、仏教界でめざましい活躍をした遍昭と違い、野山での隠棲に対するあこがれがきわめて強かったにもかかわらず、宇多上皇その他に評価されて、しばしば歌や書の面で奉仕させられた人物だった。遍昭の逸話を伝記を物語仕立てにした『大和物語』一六八段の諸本のうち、支子文庫本に見える段末の勘注では、宇多上皇の嵯峨院への行幸について、次のように述べている。

兵部尚書、絲竹管絃を奏し、権律師由性、風流艶藻を献じ、左尚書発昭、瓊章玉韻を奏す。是れ皆な当時の衆にして、各の其の能を尽すなり云々。

つまり、側近の才能ある者たちが楽器をかなでたり、美しい漢詩文を奉呈したりしたのであり、特に注目されるのは、こうした場で素性の兄である権律師の由性が活躍していることだろう。「風流艶藻を献じ」とは、恋歌を含む洒落た和歌を披露したものと思われる。恋歌を詠もうと艶っぽい女性の姿を詠もうと、無常や唯心などの教理にかすかからむものであれば、僧侶としては差し支えないことになるうし、まして、機知に富んだ軽妙な歌であれば大いに歓迎されたことだろう。つまり、由性や素性のような僧は、宮廷歌人と後代のお伽衆を合わせたような役割を期待されていたものと思われる。そうした役割は、当時としては名誉なことだったろう

し、仏教を背景とした歌を詠めば、それは教化の一端とみなされただろうが、隠棲を強く志向するようになっていけば、度々の招請は束縛と感じられたのではなからうか。素性の歌では遍昭の歌に見られるおおらかさが消え、心の凝視が深まって寂しさが感じられるようになってくるのは、そうした複雑な立場と無関係だったとは思われない。その素性の影響を受けて心に関する歌を詠んだ『古今集』の撰者たちは、いずれも不遇な下層官人であり、このことも、『古今集』の歌人たちが「人の心」一般をかえりみる原因の一つとなったことだろう。

その「人の心」のあり方について最も詳細に論じていたのは、言うまでもなく仏教だ。心を「種」や「種子」にたとえることは、仏教文献、とりわけ唯識文献にはいくらでも見られるものであり、*citta-bija* の訳である「心種」「心種子」などの語も盛んに用いられている。この場合、「心種」「心種子」とは、広義では、心がすべての業のものであることを指し、唯心・唯識を強調する学派にあつては、過去の業に色づけられて未来の行為の原因となる心を指す。これに対して素性の歌は、つれなくなつた「人の心」こそが過去の愛情の経緯を忘れさせる「種」だったのだとする点で、まさに逆転の発想が見られる。しかも、この歌にせよ先の梅の花の歌にせよ、素性の歌はそうした仏教的背景を知らなくても享受する

ことができる歌になっている。それも、複数の解釈が可能な詠み口になっている場合が多いことが注目されよう。これは、それだけ仏教表現が和語としてこなれてきたことを示している。理屈が目立つ『古今集』の他の歌と違い、素性の歌が余情に富んだものとして定家らに評価されたのは、そのような和語化の進展と無関係でない。

なお、日本の文学作品では、僧侶から還俗して官人となり、奈良時代半ばに活躍した淡海三船の漢詩、「五言 聽維摩經」が、

演化方丈室 化を方丈の室に演じ、

談玄不二門 玄を不二の門に談ず

已觀心有種 已に心に種有るを觀じ、

旋覺理無言 旋理に言無きことを覺る

（『經国集』卷十）

と述べている。維摩が方丈で不二を説いて玄妙な教化を行ったため、心が根本であって真理は言葉を離れていることが分かったとするのであり、「心に種有る」ことに触れている。小島憲之は、この漢詩は維摩会での作と推測している。

### 三 日本風な情緒と自然

素性も父遍昭と同様、言葉遊びの歌を作って『古今集』に

収録されている。

山吹の花色衣ぬしや誰問へど答へずくちなしにして

（雑躰俳諧・二〇二二）

雑躰のうちの俳諧歌に取められているこの歌は、くちなしの花を山吹色の衣に見立てたうえで、持ち主を問うたが「口無し」であって答えなかった、というだけの歌であって、機知とおおらかさという点では、父に遠く及ばない。ただ、素性の本領は別にある。たとえば、遍昭の、

いま来むといひて別れしあしたよりおもひくらしの音を  
のみぞ泣く（古今・恋五・七七二）

の歌と、「百人一首」にとられた素性の次の歌とでは、狙いがまったく異なっている。

いま来むといひしばかりに長月の有明の月を待ちいでつ  
るかな（恋四・六九二）

すなわち、両方とも「いま来むと（すぐにまたやって来るよと言って）」で始まり、女性の立場で待つ身のつらさを詠んでいるものの、遍昭の歌は前節で見たように、江南の情熱的な「子夜四時歌」を踏まえつつ「思ひくらし（朝から暮までずっとあなたを思っつてすごし）」で泣くという部分に鳴く「蛸」を掛けた面白さに重点があるのに対し、「秋の長い夜を、明け方になるまであなたがやって来るのを待ち続けてしまったことだった」と嘆く素性の歌は、末尾の「かな」が万



感の思いを伝えており、余情に富むのだ。実際、壬生忠岑『和歌十体』では、「余情体」の例として素性のこの歌をあげており、源道済『和歌十体』もそれを受け、定家『定家十体』では「幽玄様」と評している。<sup>9)</sup>つまり、遍昭は機知と技巧を重視した『古今集』の歌風の新風であるのに対して、素性の場合は、六歌仙の時代と『古今集』選者の時代をつなぐ役割を果たしつつ、さらに『新古今集』へとつながる面を持っていたのだ。

その代表は、『寛平御時后歌合』『古今六帖』『素性集』などに見える次の歌だろう。

我のみやあはれと思はむひぐらしの鳴く夕暮れの大和撫子  
これもまた、先の遍昭の歌のうち、「思う」「ひぐらし」と「なく」という共通部分を多く含みながら、こちらは、夕暮れ時にひっそりとたたずむ大和撫子（河原撫子）の可憐さを描いており、まったく別世界となっている。『古今集』に収める歌では、ほとんどのテキストが、

我のみやあはれと思はむきりぎりす鳴く夕かげの大和撫子  
(秋上・二四四)

に作っており、こちらの方が侘しさがまさるため、「ひぐらしの鳴く夕暮れ」は当初の作であって、「きりぎりす鳴く夕かげ」の方は後に手が加えられて完成度が高められたものと考えたい。

蔵中スミは、「我のみやあはれと思はむ」という知的な屈折は、『古今集』撰者好みである一方、後半の「かげりを含む叙情」は、

春の野に霞たなびきうらがなしこの夕影に鶯鳴くも

(万葉十九・四二九〇)

という大伴家持以来の流れにあるという。<sup>10)</sup>家持など『万葉集』歌人の直接の影響がどれだけあったかは不明であるため、「我のみや」という表現の方を検討してみると、『古今集』のうち、この句で始まる歌は、恋歌五に収める読人知らずの次の一種だけだ。

我のみや世を鶯となきわびむ人の心の花と散りなば

(恋五・七九八)

「この世をつらいとして鶯のようにわびしく泣くのは私だけなのだろうか。あの人の心が花のように散ってしまったならば」という嘆きの歌ではあるものの、「憂」と「うぐひす」を掛けた技巧的にかすかに遊び心が感じられる歌だ。「我のみやあはれと思はむ」という箇所は、漢詩文の「独憐（独り憐む）」といった表現やその反語形を思わせるものであり、知的な詠みぶりと言えよう。この「世を鶯となきわびむ」の歌で注目されるのは、「世を憂」しと嘆き、「心の花」や「心が散る」といった表現を用いている点で、仏教を意識した歌であることだろう。<sup>11)</sup>中国古典では、仏教が盛んになる



親が盛んに用いた素材や発想を利用しつつも異なる方向へ向かわざるをえなかつたのであり、その方向こそが『新古今集』へとつながっていく余情に富んだ世界だつたのだ。漢詩が全盛をきわめた嵯峨天皇の時期をすぎ、さらに漢詩を強く意識した歌づくりがなされた六歌仙の時代をすぎた素性の時期になって、伝統歌謡や習俗、仏教、漢詩文、あるいは渡来系氏族などの要素の交じり合いが進むなかで、日本列島の風土に即しつつ洗練の度をました独自の美意識が固まり始めたと考えるべきなのだろう。中国南朝の貴族文化を手本とした亡命百済貴族の血を引く素性は、まさにそうした過程を促進した者たちの一人だつたと思われる。祖父の良岑安世が漢詩人であつたのに対して、その子である遍昭と孫の素性の漢詩が伝わっていないことは、象徴的だ。

さて、大和撫子が「あはれ」と思われたのは、諸家が指摘するように、散り際だつたことも一因となつていよう。秋の野にひっそり咲き、夕陽の中でやがて散ろうとしている花。これは、無常の美であるが、素性はこの歌を通じてこの世は無常であることを強調し、浄土をめざすよう人々に説教しているのではない。そのようななびしい光景に限りない愛着を覺えているのだ。こうした傾向は、素性の次の歌が示すように、仏教の変質をももたらすことになる。

いづくにか世をば厭はむ心こそ野にも山にも迷ふべらな  
れ（古今・雑歌下・九四七）

出家してどれだけ人里離れた寺に隠棲したとしても、自然を愛する私の心は、美しい野や山に浮かれ出て迷い続けるだろうから、どこで世を厭えばよいのだろうと嘆く歌だ。このうち、「世を厭う」だけでなく、「心」が「迷う」という言い回しも、仏教に基づく。「心迷」という句は中国の漢詩では用例がきわめて少なく、それも「迷つて決めかねる」の意がほとんどであるのに対して、漢訳仏典では、「正しい判断を失う」「誤つた道に入り込んで執着する」といった意味で用いる例が多い。唐代の文章でも、沈彬「方等寺経蔵記」に「世を挙げて心迷ふ」（全唐文八七二）、慧能作とされる偽作の『金剛経解義』に付された「金剛般若波羅蜜経序」に「心迷へば則ち此岸、心悟れば則ち彼岸」とあるなど、用例はほとんど仏教関係の文章に限られる。素性の歌に用法が多少似ているのは、敦煌出土の『降魔変文』が、外道たちの邪見を改めさせるために仏が神通力を發揮する場面を描く際、「祇だ心、邪小なる逕に迷うが為に、化して大法門に帰依せしむ」と述べている箇所だろう。修行に専念せず、花が咲き紅葉が美しい野山に心を惹かれ続けるのは、仏教本来の立場からすれば、大道から外れて邪小小道に心が迷いこんでいる状態ではないはずでありながら、素性はそうした自らの性癖

を改めようとはしていない。

素性は、また次のようにも詠っている。

いつまでか野辺に心のあくがれむ花し散らずは千代も経ぬべし（古今・春下・九六）

いつたいつまで野辺に心があこがれ続けるのか、花が散るからこそ寺に戻る気になるものの、散らなければ花をめでながら永遠に野にたたくみ続けることだろう、というのだ。素性は、美しい花も紅葉もやがて散っていくことを知っている。つまり、野や山に対する愛好は無常なものに対する執着にすぎないことを知っている。しかし、野や山に対する物狂おしいまでの愛情を、どうすることもできないのだ。「あくがる」という言葉は、和歌ではこの素性の歌が初出のようだ。これは、まさに遍昭が詠んだ花に惑う蝶のあり方にほかならない。違いは、遍昭の蝶は無常を知らないのに対して、素性の方は、無常と知りつつも花咲く野辺に迷わずにおれない点だ。「もののあはれ」を好む傾向は、このような状況と深く関わっている。仏教の立場からすれば、そうした無常の知り方は頭だけの理解にすぎず、真の無常の体得とは言えないが、素性はそうしたあり方を詠い続けるのだ。

ただ、仏教の立場とは矛盾することを知りつつ花へのただならぬ愛情を詠い、「心」と「散る」という語を用いたのは、素性一人ではなかった。

はを初め、るを果にて、眺めを掛けて、時の歌よめと、人の言ひければ、よみける 僧正聖宝

花のなかめにあくやとてわけゆけばころぞともちりぬべらなり（古今・物名・四六八）

花が咲く林を、目が飽きるかと思つて中にわけ入っていくと、飽きるどころかすっかり魅せられてしまい、心が花とともに散つてしまふそうだと、いうのだ。真言宗の真雅僧正の弟子で東大寺別当となつた聖宝（九〇九）のこの歌は、詞書が示すように、「は」の字で始めて「る」で終り、途中に「眺め（なかめ）」という言葉を読み込んで春の歌を詠めという注文に応えた物名の歌だった。この歌が『遍昭集』に収められているのは、遍昭の和歌に似た面があり、遍昭作とする伝承があつたためだろう。作者がいずれだったせよ、『古今集』前後の花の歌の多くが「心」という語を含んでいるのは、花を詠む歌人たちが心を見つめる仏教、それも四季を素材として受け止められた日本風な仏教を背景としながら表現を模索していったためと考えられる。素性の歌は、そうした傾向を極端なまでに推し進めたものなのだ。

#### 四 遍昭・素性親子から『源氏物語』へ

このように見てくれば、心を乱してしまうほど強い自然へ

の愛情は、無常と無執着を説く仏教の常識を前提としたうえで、その常識に背くもの、しかも制御できないものとして扱われていること、しかも言葉遊びと結びついている場合もあることが知られよう。言葉遊びと技巧とは、区別がたい面もあるため、我々はここでは、美に対する新しい感性が示されていると同時に、日本語の表現を広げる試みが同時になされていること、その際、仏教が大きな役割を演じていることに注意しておけばよい。

自然への愛情を述べるにあたり、仏教文献を活用して生まれたこうした表現は、当然ながら男女の恋について述べる際にも利用されることになる。たとえば、『源氏物語』が、素性のこの和歌を恋の場で用いていることをあげておきたい。柏木巻では、女三宮との密通を光源氏に知られてしまった柏木は、以前から出家を考えていたものの、「親たちの御恨みを思ひて、野山にもあくがれむ道の重き絆になるべくおほえ」ている。つまり、人里はなれた山中での出家生活に心惹かれながらも、両親の嘆きを思うとそれが出家に対する束縛となるだろうと思われたため、まぎらして過ごしてきたというのだ。この場合、素性の歌は、できるだけ山奥深くにのがれ入りたいという希望を表すために用いられている。ところが、そのすぐ後では、急激に弱って死が近くなった柏木は、女三宮と目を合わせて以来、迷い始めた魂が身に戻らなく

なつたと回顧し、「かの院のうちにあくがれ歩かば、結びとどめたまへよ」と言つて泣き笑いする。つまり、女三宮の住む光源氏の六条院のうちを自分の魂が「あくがれ歩」いているのなら、結び留める呪術をしてくれるよう頼むのだ。ここでは、心があくがれ出てしまい、見はれてしまつていつまでもたたずみ続けるだろうと素性が詠った野山が、春夏秋冬の四季の自然を手本として建築された六条宮と、そこに住んでいて柏木には花のように思われた女三宮に置き換えられている。しかも、この柏木の述懐の少し後で、見舞いに尋ねてきた親友の夕霧は、やつれきつた柏木を見て涙をこぼしながら、「後れ先だつ隔てなくとこそ契りきこえしか（死ぬ時は遅れ先立つことなくとお約束もうしたではないか）」とかきくどいている。これは先に見たように、遍昭が『法華経』を利用して詠んだ「もとの露先のしづくや世の中の遅れ先立つためしなるらむ」を踏まえる。つまり、『源氏物語』のこの一段は、遍昭・素性の親子の和歌を強く意識しながら書かれているのだ。

仏教を背景としつつこのような和歌を生み出すにいたつた自然への愛着と感性は、逆に日本仏教そのものを変えてゆく。これについては、草木成仏説<sup>16</sup>が示す通りだ。和歌の動向と、仏教思想の動向は、むしろ重なっている。

註

- (1) 小島憲之『古今集以前—詩と歌の交流—』(塙書店、一九七六年)。「闇香」の語の意味については、田中幹子「春の夜の香り」について—『古今和歌集』躬恒歌を中心に—(『中古文学』五十七号、一九九六年五月)。
- (2) 此島正年「うたて」の変遷(『湘南文学』二十二号、一九八八年三月)二頁。
- (3) 入矢義高監修・古賀英彦編著『禅語辞典』(思文閣出版、一九九一年)三九八頁。
- (4) 石井公成「漢詩から和歌へ(二)—良岑安世・僧正遍昭・索性法師—」(『駒澤大学仏教学部論集』第四十七号、二〇一六年十月)。
- (5) 太田水穂『日本和歌史論』(岩波書店、一九四九年)。
- (6) 窪田空穂『古今和歌集評釈』上巻(改訂版)(東京堂、一九六〇年)一七一頁。窪田のこうした主張の意義、および、その主張が無視された理由については、藤平春男『藤平春男著作集第2巻 新古今とその前後』「古今和歌集の技法」(笠間書院、一九九七年)。
- (7) 素性の伝記については、不明な点が多く、生没年すら知られていない。近年のまとまった伝記である、宮城秀行「素性集」解題(宮城秀行・高野晴代・鈴木宏子『和歌文学大系18 小町集・遍昭集・業平集・素性集・伊勢集・猿丸集』、明治書院、一九九八年)では、承和十一年(八四四)頃に生まれ、延喜十年(九一〇)頃没したと推定されている。石上の良因院に長く住んでいたようであり、しばしば貴顕に召されて和歌を詠んだり歌合せや祝の歌を出詠しており、宇多上皇に奉仕する歌人たちを代表する一人だった。素性に関する最もまとまった研究は、藏中スミ『歌人素性の研究—平安初期和歌文学の世界—』(桜楓社、一九八〇年)であり、テキストの調査と漢詩文との比較を柱とする本書はきわめて有益であるが、素性の歌と仏教と関係についてはあまり注意されていない。
- (8) 小島憲之『国風暗黒時代の文学 上』「仏教詩をめぐって」(塙書房、一九六八年)四九三—四頁。
- (9) 藏中、註(7)前掲書、「第三章 後代への影響」、二〇三—四頁。
- (10) 同、第二章第二節「当代漢詩との交渉(その一)」。
- (11) 中野方子『平安前期歌語と和漢比較文学的研究』「第六章」心の花」考—平安前期歌語と仏典」(笠間書院、二〇〇五年)。
- (12) 藏中、註(7)前掲書、第二章第二節「当代漢詩との交渉(その一)」、一一九頁。
- (13) 小林彩子「なでしこ」の歌の系譜—比喩表現の展開をめぐって—(『古典研究』二十二号、一九九五年五月)。
- (14) 高橋文二『王朝まどろみ論』「あくがるる心」と鎮魂」(笠間書院、一九九五年)一三六頁以下。

(15) 山本登朗「王朝和歌と花―「心」の視点から―」(片桐洋一編『王朝和歌の世界―自然感情と美意識―』、世界思想社、一九八四年)。

(16) 石井公成「草木成仏説の背景としての和歌」(『叡山学院彙報』三十二号、二〇〇七年一月。『叡山学院研究紀要』二十九号、二〇〇七年三月、に転載)

【付記】 本稿は、良岑安世・僧正遍昭・素性法師という三代の百済系の文人たちの文学作品について検討した連載論文の最終篇だ。ただ、最初の論文である「漢詩から和歌へ(一)―良岑安世・僧正遍昭・素性法師―」(『駒澤短期大学仏教論集』一〇号、二〇〇〇四年十月)の刊行年月が示すように、十年以上に書いておりながら、事情があつてそのままにしていた関係で、以後、本稿の一部を「東アジアの仏典」(小峯和明編『漢文文化圏の説話世界』、竹林舎、二〇一〇年)、「言葉遊びと仏教の関係―『古今和歌集』物名を手がかりとして―」(『駒澤大学仏教学部論集』四十四号、二〇一三年十月)などの諸論文で用いた。このため、本稿はそれらと重なる部分もかなりあるのだが、未発表の部分も多いうえ、素性法師の和歌と仏教の関係について詳細に論じた論考はこれまで無いようなので、多少手を加えたうえで刊行することにした。

(キーワード) 『古今和歌集』、『維摩経』、唯識、大和撫子

漢詩から和歌へ(三)(石井)